明治維新と埼玉県、新しい村々の誕生―明治から昭和へ(1)―

慶応4年(1868)正月、鳥羽・伏見の戦いを契機に戊辰戦争(ぼしんせんそう)がおこり、薩摩藩・長州藩を中心とする新政府軍が江戸へ向けて進撃しました。関東の戦乱が終息した7月、新政府は江戸を「東京」と改称し、9月には年号を「明治」と改元しました。新政府は明治2年(1869)に版籍奉還を行い、各藩主に対し、支配していた領地と人民を奉還させ、旧藩主をもとの藩の知藩事(ちはんじ)に任命しました。明治4年(1871)7月、新政府は廃藩置県を断行しました。廃藩置県により旧知藩事を解任され、新しく設置された府県には政府が任命する府知事・県知事（県令）が置かれました。7月の廃藩置県では全国に3府302県が設置され、蓮田市域は岩槻県・浦和県・忍県の3県に管轄されました。まもなく11月には府県が整理統合され、全国で3府72県になりました。現在の埼玉県域では埼玉県と入間県が誕生し、蓮田市域はすべて埼玉県に管轄されました。その後、入間県の廃止や熊谷県の設置・廃止などがありましたが、埼玉県は明治9年8月の時点で、ほぼ現在と同じ県域となっています。

蓮田市域の村々は、明治7年(1874)には黒浜村が岡泉村半蔵受日川新田・日川新田・長崎村と合併して黒浜村に、上蓮田村・下蓮田村が合併して蓮田村に、上閏戸村・中閏戸村・下閏戸村が合併して閏戸村に、根金村・根金新田村が合併して根金村になりました。明治22年(1889)の町村制施行にあわせ、高虫村・上平野村・駒崎村・井沼村・根金村が合併して平野村が、閏戸村・蓮田村・貝塚村が合併して綾瀬村が、南新宿村・城村・黒浜村・江ケ崎村・笹山村が合併して黒浜村が誕生しました。その後、昭和9年(1934)には綾瀬村が町制を施行し、蓮田町となりました。

蓮田駅の開業と幻の武州鉄道　―明治から昭和へ(2)―

蓮田駅の開業は古く、明治18年(1885)私設鉄道の日本鉄道第二区線(現ＪＲ宇都宮線)の大宮・宇都宮駅間開業と同時にできました。これは停車場敷地(512歩:1,700㎡)の寄付を伴う駅誘致運動により実現したものです。これを記念して建立されたのが「蓮田車站記念碑(はすだしゃたんきねんひ)」です。蓮田駅の乗降客数は明治20年(1887)時点で7,000人前後、旅客運賃収入は1,621円でしたが、その後急激に増加し大正6年(1917)には乗降客数約58,000人、旅客運賃収入は13,461円になっています。蓮田から上野までの所要時間は、明治22年の時刻表によると１時間10分程度要していたようです。また、当時の利用は、旅客だけではなく、岩槻町・菖蒲町などから集積される貨物の取扱量も多く、明治20年時点での貨物運賃収入は1,105円であったものが、大正6年(1917)時点では旅客運賃以上に25,697円と増加しています。

明治10年代末から私鉄起業熱が高まり、各地で私鉄の敷設が相次ぎました。この私鉄ブームは恐慌や日清戦争により一時下火になるものの、明治30年代初期まで続きました。埼玉県の私鉄ブームは明治20年代後半から始まり、東武鉄道など数多くの鉄道建設が計画されました。埼玉県の鉄道網は、首都東京と埼玉とを南北放射状に結ぶ鉄道がまず敷設されましたが、この時期には県内を東西に横断する鉄道も計画されるようになりました。この頃に計画された鉄道のひとつが武州鉄道でした。川口から春岡(さいたま市見沼区)までの敷設を計画していた中央鉄道株式会社は、明治45年(1912)岩槻から蓮田を経て行田までの線路延長を決定しました。中央鉄道は後に武州鉄道と改め、大正13年(1924)には蓮田～岩槻間6.4kmを開業しました。武州鉄道はその後、神根(川口市)まで延伸しました。

しかし、利用客の減少等業績不振に悩み、昭和13年(1938)会社は解散しました。今では幻の鉄道ですが、蓮田駅東口側の中央公民館脇に線路跡の面影を偲ぶことができます。

蓮田車站記念碑

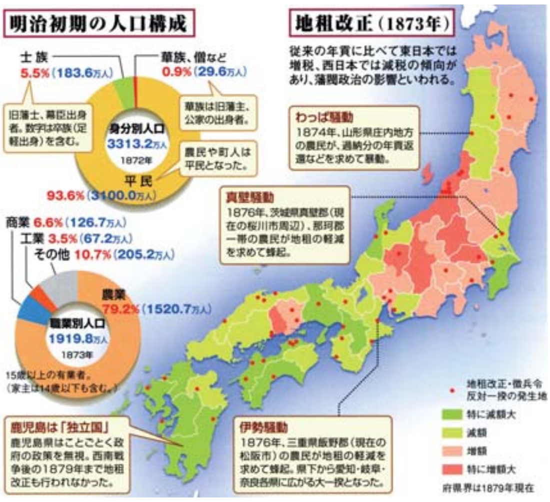
蓮田車站記念碑は、駅開業に尽力した飯野吉之丞、田口命助、吉田源左衛門、長谷部庄左衛門、小山丑松、斉藤米吉の功績を後世に伝えるために、明治36年(1903)に建立されました。

土地の寄贈者は、飯野、小山、長谷部の他に黒須彦太郎も寄付していました。

平成25年に西口再開発に伴い再び駅前に移されました。

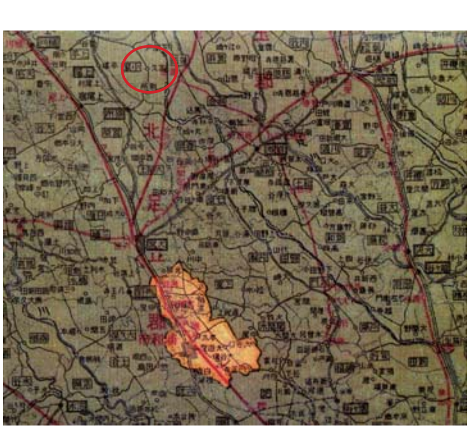
西口駅前風景（昭和9年）

「図解日本史」より



馬込武州鉄道停車場站碑（個人宅）

武州鉄道の車站建設碑です。



武州鉄道が記載されている地図

蓮田から川口神根までの線路が地図に記載されており、昭和12年以前の地図と考えられます。

武州鉄道（客車）

第一次世界大戦そして第二次世界大戦へ
様々な災害と復興へ　―明治から昭和へ(3)―

明治27年(1894)8月からの日清戦争、同37年(1904)2月からの日露戦争と明治時代には2度の戦争がありました。両戦争による軍備の増強は地租(税)増額をもたらし、戦後経営の事業拡張は地方財政を膨張させました。また、資本主義の発展は、それまで農業中心だった産業構造を次第に変化させていきました。

日清・日露戦争の時期には多くの兵士が全国から出征しました。蓮田市域から日清戦争の時には20名以上が出征したことが、また、日露戦争の時には70名出征したことがわかっています。出征兵士の送迎や戦死者の葬儀、出征兵士やその家族への慰問援助等、村々の果たす役割は大きいものでした。また、この時期には各地に戦没者の記念碑・忠魂碑などがつくられましたが、それらは在郷軍人(兵役を終了したが戦争等の際には召集される民間人)の団体がつくったものです。

また、日本の急峻な地形から古代から多くの水害を受けてきました。市内でも安政6年(1859)の水害について初めての記録が残されていますが、明治年間には何度も大水害を受けました。特に明治43年(1910)の水害は寛保2年(1742)以来の大水害で決壊した県内の堤防は314か所、死者は324人で、元荒川・綾瀬川・見沼代用水路の堤防は決壊し、江戸川・中川・荒川の改修工事が国の直轄で行われました。また、作物のほとんどが収穫できない状態となり、多くの人が県の罹災(りさい)援助を受けています。各村では、この災害による歳入不足を起債で補わなくてはならず、財政を圧迫したことが各村役場の行政資料に残されるだけでなく、「堤防修築記」(石碑)が閏戸の見沼代用水脇に残されています。

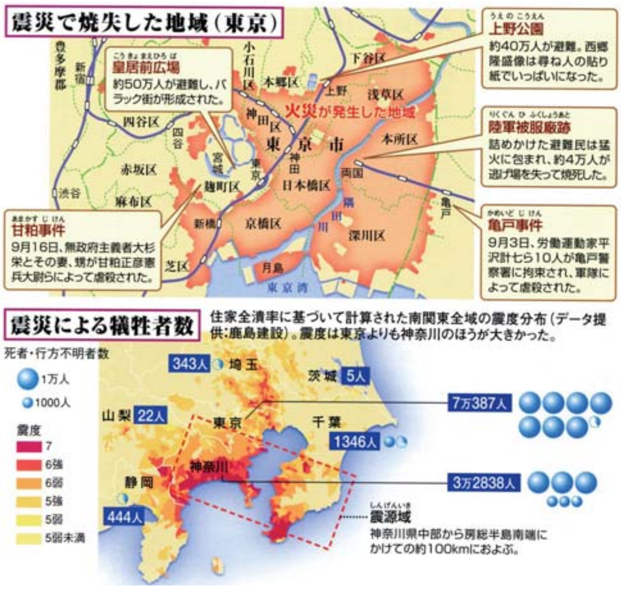
昭和4年(1929)の世界恐慌の影響で、日本も農村を含め、深刻な不況に見舞われました(昭和恐慌)。農業中心の産業構造だった蓮田市域では、昭和恐慌による農業の打撃は大きく、農産物価格が暴落しました。こうした事態に対し、各村は救農土木事業を行ったり、各農会(農協)はさまざまな事業を行い農業経営を立て直そうとしました。

軍の一部は満州(中国東北部)などの利権を守るため中国進出に動き、昭和6年(1931)の満州事変から日中戦争へと軍国主義の道を歩み始めていきました。昭和11年以降に満蒙開拓が進められ埼玉県内からも中川村開拓団など7団と1,387名の満蒙開拓青少年義勇軍が送られました。やがて中国問題でアメリカと対立すると、石油などの資源を求め東南アジアに進出し、昭和16年(1941)、太平洋戦争に突入していきました。長引く戦争で戦時体制が強化され、国民はいやおうなく戦争に動員されていきました。蓮田市域からも多くの兵士が出征し、中国北部や内モンゴル、満州などにも派遣されていきました。戦争の犠牲になった人も多く、終戦までに蓮田市域から出た戦没者は400名以上にのぼります。出征以外にも、地域ではさまざまなかたちで戦争の影響を受けました。満州事変後、軍の指揮により防護団(のちに消防組と統合し警防団となる)がつくられ、防空演習を行っています。また、農村から多くの兵士が出征したため、食料不足が深刻となり、工業も軍需生産中心となったため、生活必需品も不足しました。そのため、さまざまな物資が配給制となりましたが、配給量は少ないものでした。また、県内には軍事施設や軍需工場が多くつくられ、学童の集団疎開地にもなりましたが、蓮田では妙楽寺(高虫)に全国で初めての「疎開保育園」が開設されました(このことは「ケンちゃんとトシせんせい」という童話にもなっています)。

また、熊谷は終戦前夜に最後の空襲被害を受けました。

昭和20年(1945)8月15日、日本はポツダム宣言を受け入れ、アメリカなどの連合国に降伏し太平洋戦争は終結しました。マッカーサーを最高司令官とするＧＨＱ(連合国軍最高司令官総司令部)が日本に進駐し、軍国主義を一掃し日本の民主化をすすめていきました。これにより婦人参政権の実現、農地改革の実施、労働組合の助長、学校教育の民主化などの政策が進められました。埼玉県には昭和20年11月までに約1万7千人の米国軍兵士が進駐し、埼玉県の占領行政を担当する埼玉軍政部が昭和24年(1949)10月まで存続しました。その間に民主化政策、米の供出、ヤミ撲滅運動、インフレ防止のための貯蓄運動、カスリン台風(昭和22年:1947)復興支援などを行い、県民生活の向上に多くの役割を果たしました。

芥川龍之介撰文碑(根金)



関東大震災の被害状況　「図解日本史」より

大正12年(1923)には、関東大震災が起こり死者・行方不明者13万人余という大被害を被り、第一次世界大戦後の「戦後恐慌」に追い打ちをかけた『震災恐慌』が起こりました。

原爆投下後の長崎浦上天主堂

蓮田駅西口（昭和8年）

明治43年の水害写真(川越付近)
国土交通省荒川上流河川事務所より